九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資料と公共性 ： 2018年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦
九州大学大学院人文科学研究院 | 九州大学大学院統合新領域学府：教授

市澤, 哲
神戸大学大学院人文科学研究科：教授

石田, 栄美
九州大学附属図書館 | 九州大学大学院統合新領域学府：准教授

後小路, 雅弘
九州大学大学院人文科学研究院 ： 教授

他

https://doi.org/10.15017/2230688

出版情報：2019-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

アーカイブズ学と公共歴史学に関する研究動向
―「アーカイブ」とその「活用」を問い直す―

清原　和之

1.　はじめに

アーカイブズ学と歴史学とは、近代科学として成立して以来、不即不離の関係を保ってきた。両者は互いの知見を交換しつつ、それぞれ独自の発展を遂げてきたが、近年、再び資料を介して接点が生まれつつある。例えば、昨年の『歴史学研究』（歴史学研究会編）では、歴史資料のデジタル化やデジタルアーカイブ、デジタルデータの利活用をめぐって、「歴史家とアーキビストの対話」の場がもたれた[1)]。そのなかで、後藤真は、歴史学者が「みずからの歴史資料をどのように使っているかという説明を行い、その意義を述べる必要がある」として「歴史学のアカウンタビリティ」を提言しているが[2)]、歴史資料を管理、保存、利活用する主体や歴史研究者／アーキビスト等の専門職のあり方それ自体を問い直すには至っていない。しかしながら、20 世紀末以降の「アーカイブズ」と「デジタルアーカイブ」をめぐるアカデミズムにおける語用のズレはもとより、災害等を契機とした資料保存活動の広がりや文化遺産政策と呼応した「アーカイブ」の市民社会における「領有」そのものが、公共空間における資料の管理・利活用のあり方や社会における専門知の意味を問う必要性をアクチュアルにしてきているように思われる。そこで、本稿では、アーカイブズ学の立場から、近年の研究動向を整理し、公共空間における資料の管理、保存、利活用をめぐる市民と専門職との関係性を考えてみたい。

アーカイブズ学における公共性問題を問うにあたり、まず前提として確認しておかなければならないのが、アーカイブズ学の立ち位置である。アーカイブズ学ないしアーキビストは資料の「保存」については重視するが、「活用」については課題があるといわれるむきもあるが、アーカイブズ学はそもそも市民社会への資料の提供を使命としてきた。それでは、なぜ、近年改めてアーカイブズ学と資料の公共性の問題が問われることとなってきているのだろうか。ここでは、本論に入る前に、社会におけるアーカイブズ学の対象資料とアーキビストの役割がどのように変遷してきたのか、カナダのアーカイブズ学研究者テリー・クックの整理に則して、簡潔に把握しておく[3)]。クックは、アーカイブズ理論の変遷を「証拠」、「記憶」、「アイデンティティ」、「コミュニティ」の４つの鍵概念を軸に区分する 。第 1 の「証拠」段階（19 世紀～1930 年頃）は、フランスに始まり、ヨーロッパの国民国家へと波及した「前近代のアーカイビング」を指し、この時期のアーキビストは「政府機関の法的証拠の管理人・保護者」としての役割を担った。他方、私的な記録と個人的アーカイブズは主観的に収集されたコレクションとみなされ、「証拠」パラダイムからすれば非-アーカイブズとされ、伝統から外れた私的資料は、「熱狂的なコレクター、古物収集家の範疇」とみなされた。第２の「記憶」段階（1930～1970 年代）は、アメリカを中心に

国際的に広まった「近代のアーカイビング」を指し、歴史学的素養をもつアーキビストによって、政府の生み出す膨大な量の記録を評価選別する役割が担われた。そして、歴史家への貢献を使命としたアーキビストは「主観的に文化的記憶の資源を生み出し」、公的記憶の創造に寄与した。この時期、私的、個人的アーカイブズはますます専門的アーキビストの元にもたらされ、「業務」記録よりも私的歴史的な「手稿」の収集に偏愛をもつアーキビストが現れる一方、20 世紀半ば以降は現用記録を選別廃棄するレコード・マネジメントが分離領域として専門化していくこととなる。第３の「アイデンティティ」の段階（1970～2000 年代初頭）は、専門職としてのアーキビストが大学院の教育プログラムを通して輩出され、アーカイブズ学研究が活性化し、独自のアイデンティティが創造された時期に相当する。この時期、ポストモダン理論の影響を受けてアーカイブズ学は変容する。すなわち、「アーカイブズ資料のなかに見出される保護されるべき唯一の「真実」などはなく、そこには多数の真実、多数の声、多数の観点、多数の物語がある」のであり、アーキビストは保存されるべき記録の社会的価値を調査し、社会それ自体の機能と活動を反映させていく社会記憶の形成者として、「ポストモダン・アーカイビング」の役割を担っていくこととなる。第４の「コミュニティ」の段階（2000 年代後半以降）は、「参加型アーカイビング」と呼ばれる。この時期、新たな社会的現実としてのインターネットは「無数の非政府組織、ロビー団体、コミュニティの活動家、「普通の」市民たちを繋ぎ合わせ」、「民族や人種、性、信条などを共有する」共同体の人々は彼らのコミュニティを創造し、集団のアイデンティティを育て、彼らの活動を遂行するために記録を再創造し始めるようになる。「コミュニティ・アーカイブズの記録はアーカイブズ資源であるのみならず、そうしたコミュニティのアイデンティティの一部」であり、専門職アーキビストは彼ら自身、「プロダクト」としてのアーカイブズの入手というよりも、「社会のなかの多くの人々によって共有された、参加の「プロセス」としてのアーカイビングを推奨」していく、コミュニティのなかで働く「助言者」となっていく必要がある、とクックは主張する。

以上のテリー・クックの整理からわかるのは、アーカイブズ学が対象とすべき資料が公的記録から私文書へと拡大してきたこと、社会のなかで何を保存し継承すきかが問われたこと、記録がコミュニティの創造、アイデンティティの（再）創造と結びつけて理解されるようになったこと、アーキビストの役割が公的記録の保護者から社会記憶の媒介者、そして、コミュニティのアーカイビングの助言者へと変化してきたことである。このアーカイブズ学の変遷には、アーカイブズ資料の受け手から資料の意味付与の主体へという、ユーザーに対する認識の変化が深く関わっており、資料の「活用」とはアーカイブズ資料や資料データの分析や加工以上に、多様な主体による新たな価値を付与する行為として理解されている。そして、アーカイビングの主体が多様化するとともに、人的・物的資源が縮減される現代社会において、社会全体でどの資料をいかに遺し、次世代へと継承していくべきかをめぐる合意形成の必要性が高まってきている。こうしたなかで、資料の公共的価値とは何か、アーキビストの専門性とは何かが問われてきているのである。こうした問い

に、現代のアーカイブズ学はいかに応えているのか、公共歴史学との接点を導きの糸として研究動向を整理し、今後の研究のための課題を示したい。

2. 「アーカイブ的転回」と「再転回」

「アーカイブズ」と「アーカイブ」という二つの用語は、日本のみならず、海外においてもその用法をめぐって混乱や対立が生じている。しかし、最近では、アーカイブズ学のなかでも「アーカイブ」の意義を積極的に認めていく傾向がみられる。それはどのような意味においてなのか、オランダのアーキビストで、現代アーカイブズ学を牽引してきたエリック・ケテラールの論考からみていきたい[4]（以下、本文中の括弧内にKetelaar(2016)の頁数を示す）。

ケテラールは、1990年代から2000年代にかけて、アーカイブズ学の領域外の哲学、人類学、社会学、精神分析学、文学批評、芸術学などの分野において、「アーカイブ的転回」が生じてきたという。そして、この転回がアーカイブズ学にも作用し、アーカイブズ学理論、方法論、実践に新たな展望をもたらす「再転回」を生じさせていると指摘する。アーカイブズとは、業務遂行の過程およびその活動の結果として作成、収受された文書全体の「塊り」を指す。アーカイブズ学は歴史家や行政官、その他の利用者が手段とみなすアーカイブズを「目的」として研究することで学問分野としての自律性を確保してきた。しかし、ジャック・デリダが1994年に「一般アーカイブ学の何らかの計画を、想像してみよう。こうした言葉は実在しないが、それはアーカイブの、一般的で学際的な科学を名指しうるであろう」と述べたように[5]、これまでアーカイブズを「手段」としてきた諸学問分野でアーカイブズを「目的」として研究する「アーカイブ的転回」が生じてきた（pp. 231-37）。その代表的研究者は、人類学者のアン・ローラ・ストーラーである。ストーラーは、植民地国家のアーカイブズを知識生産の場として捉え、植民地における権力が構築されるアーカイビングのプロセスを読み解く民族誌を提示する[6]。また、歴史学においても、アーカイブのエージェンシーに着目して、過去のアーカイブズ・システムそれ自体やアーカイブに関与する歴史家に与える影響に関する研究が現れてきている[7]。この「アーカイブ的転回」はアーカイブズ学に、実際のアーカイブ的文書から作成の機能的プロセスやコンテクストへ、成果物としてのアーカイブからプロセスとしてのアーカイブへ、物理的なモノから行為そのものへの移行をもたらした、とケテラールは指摘する（pp. 236-7）。「アーカイブ的転回」の二つ目は、アーカイブを実体やプロセスを分析するための方法論的なレンズとして使用することである（pp. 238-40）。すなわち、アーカイブズを「それ自体として」見るのではなく、何らかの物事を「アーカイブとして」見ることを指す。この見方では、「高架下の落書きのコレクション」から「ヒトゲノム」、お気に入りのサイトのブックマークからユーチューブまで、あらゆるコレクションがアーカイブとみなされる。そこに、従来アーカイブズ学が重視してきた原-秩序は無い。しかしながら、ケテラールは、重要なのは「何がアーカイブであるか」ではなく、「特定の個人や集団がどのようにアーカイブを知

覚し、理解しているか」を問うことである、と指摘する。すなわち、「アーカイブはそれ自体に本質的な特性があるのではなく、作成者やユーザー、アーキビストがアーカイブのなかに意味を見出し、あるいは意味を生み出し、そうした意味が自己と「物事のより大きな秩序」との関係性を構築し、再構築する際に役立つのである」(p. 239)。それでは、これまで述べてきた「アーカイブ的転回」における「アーカイブ」とは何か。ケテラールと同様に、アーカイブ的転回を支持する立場から、ジャネット・バスティアンはアーカイブ（the archive）を「知りえることと知りえないことのすべてとしてだけでなく、コミュニティのアイデンティティと自己認識の場、一方では一貫した知の蓄積、他方では海綿のような情報の流動性を持ち、固定された所在地を持たない特定の場所であり、情念とともに感情と情動の場であり、重要なこととして、証拠と記憶のためのコンテクスト」が与えられるもの、として捉えている [8)]。このような意味で、アーカイブ的転回はアーカイブズ学の領域を拡張しつつ、「その対象は関与する主体の出所に拘束された道具であり、公的、ないし、私的な「しごと」のやり取りの副産物としての記録／アーカイブズの性質を保持している」（p. 240)。それゆえ、ケテラールは記録ないしアーカイブ（ズ）を「いかなる媒体、形式、フォーマットであれ、法的義務の履行あるいは業務の遂行ないしその目的において、組織あるいは個人によって、証拠として、そして／あるいは、資産として作成し、収受し、保持した情報」という ISO 30300 の定義 [9)]において捉えることを提唱する。

それでは、アーカイブ的転回はアーカイブズ学をいかに「再転回」させつつあるのだろうか。ケテラールは他の学問分野からのアーカイブズ学への作用を言語論的転回、社会的転回、遂行的転回、表象的転回の 4 つに区分して論じている（pp. 247-59)。言語論的転回はアーキビストにテクストが何を意味するかだけでなく、テクストの働きを再検討させるよう導いた、とケテラールはいう。例えば、資料のまとまりとしてのフォンドの意味と真正性は時と場を通じて伝達されるものであり、「原秩序はアーキビストによって構築され、再構築されるもの」として捉えられることとなった。次に、社会的転回により、「アーカイブは単なる保管主体ではなく、ある一つのプロセスであり、媒介された社会的、文化的実践」であると理解される。そして、記録は社会的に構成されたモノとして、「記録と社会世界との相互作用」が強調されることとなった。そして、遂行的転回では、記録は「何かを成し遂げ、前と後の状態に差異を生み出す」エージェンシーとして捉えられることとなった。ここでは、「それが何であるか」ではなく「それが何をするか」という記録の行為遂行性が重視されることとなる。最後に、表象的転回では、過去の表象としての集合記憶とアーカイブズとが関係づけられることとなった。ここでは、アーカイブズは「個人の記憶から集合的想起への移行過程において使用される無数の異なるデバイスのなかに」[10)]あるものとして理解される。そして、記憶にとっての「試金石」としてのアーカイブズの唯一性は、物理的な文書それ自体でも、その中身の情報でもなく、記録が生み出されたプロセスと個々のアイテムがファイルとして束ねられ、そのほかの文書のコンテクストのなかに位置づけられることである、とケテラールは主張する。以上のような「アーカイブ的転回」

と「再転回」によって、アーカイブはあるプロセスとして、また、何らかの主体に媒介された社会的文化的実践として理解されることとなった。そして、プロセスとコンテクストに拘束された「アーカイブの意志」はある経験に枠づけられた行為主体によって遂行的に上演されるものとして理解されてきている（p. 260）。

こうした「アーカイブ的転回」を経た後においては、記録の作成、管理、保存、処分というアーカイブズ業務は記憶構築の手段であり、アーキビストの行為遂行性のみならず、ユーザーによる資料の利活用も新たな価値づけ、意味付与行為として捉えられることとなる。それでは、公共空間におけるアーカイブの「活用」にはいかなる意味が与えられうるのか。ここに、アーカイブズ学と公共歴史学との接点がある。

3. アーカイブズ学と公共歴史学

3.1 アメリカ

公共歴史学は北米において 19 世紀後半以降に発展してきた知識生産の運動で、1970 年代後半にはアカデミックの外部で活躍する歴史学の素養を持つ人々の実社会での歴史的実践として、「公共歴史学」という言葉が明確に用いられるようになる。そして、1979 年には、全米公共歴史学協会が設立され、その学会誌『パブリック・ヒストリアン』も発行されることとなる [11]。公共歴史学とアーカイブズ学との接点として注目されるのは、この『パブリック・ヒストリアン』で 1986 年に組まれた「アーカイブズと公共歴史学」の特集である。1980 年代は、アメリカのアーキビストたちの間で、社会全体の記録を将来にどう遺すかが喫緊の課題として意識された時代であった。こうしたなかで、アーキビストとパブリック・ヒストリアンには何ができるか、何をすべきかを問うたのがこの特集であった [12]。その中の一つに、アーキビストのリチャード・コックスの論考がある。「合衆国におけるアーキビストとパブリック・ヒストリアン」と題された論考のなかで、コックスは両者の境界は漠然としており、アーキビストは自身をパブリック・ヒストリアンとみなし、パブリック・ヒストリアンは資料の収集を公共歴史学の重要な一部とみなしてきたという。こうしたなかで、教育や専門職の地位、職業全般にわたって非生産的な議論がなされてきたが、両者が協同すべき領域がある、とコックスは主張する。

> 「アーキビストとパブリック・ヒストリアンはアメリカの文書的遺産の同定、保存、管理のために、同時代の社会的課題や問題に取り組むための歴史的知識の実用的価値の促進のために、そして、教育の整備や養成のような類似の専門的関心の解決のために共同して取り組むべきである」[13]

とりわけ、コックスが協同して取り組むべき課題として提起しているのは、現代社会のドキュメンテーションである。当時のアメリカのアーカイブズ学界では、複雑化する産業社会と保持される文書量の増大に直面して、伝統的な歴史的価値を評価する方法から、現代

の社会的価値の評価へとアプローチの仕方が変わりつつある時期にあたっていた。社会的価値を評価選別する方法論として提唱されたのが「ドキュメンテーション戦略」と呼ばれるものである。この方法論は、「継続的なイシュー、活動、機能、主題の適切なドキュメンテーションを確保するために体系化されたプラン」として説明され、「この戦略は通常、記録作成者、管理者、アーキビスト、利用者、他の専門家、受益者、その他の利害団体に関わる継続中のメカニズムによって設計され、展開され、部分的に実行される」ものとされる[14]。このドキュメンテーション戦略への重要な関与者として、政府機関や企業、その他の団体に関わるパブリック・ヒストリアンを位置づけ、彼らの専門的知識の必要性を訴えたのであった。

その後のアーキビストとパブリック・ヒストリアンとの接点は、20 世紀末以降の資料のデジタル化の流れの中で生じてきている。トレバー・オーウェンズとジェス・ジョンストンによれば[15]、「歴史家は公共歴史学に基づいてコミュニティにおける実践を発展させる一方、アーキビストは彼らの仕事をユーザー中心のものとして枠づけ直し、コミュニティと彼らの記録に直接的に関与」するようになった。こうしたなかで、近年、アーカイブズへの公共的アクセスの増強とアーカイブズ記録の処理への市民の幅広い関与を促すことが目指されている。この「参加型アーカイブ」と呼ばれる試みは「アーカイブズ専門職以外の人々が知識と資源へと寄与し、たいていはオンライン環境下で、アーカイブズ資料についての理解を増大させる結果となること」[16]とされる。その実践例としてオーウェンズとジョンストンが特に採り上げているのが、「南アジア系アメリカン・デジタル・アーカイブ」（South Asian American Digital Archive, SAADA）[17]で、このデジタルアーカイブは「ごく少数の博物館しか南アジア系アメリカ人の展示を組織化せず、アーカイブズ保管庫は南アジア系アメリカ人の歴史に関する資料を体系的に収集してこなかった」ことから立ち上げられ、SAADA は所有者たちから資料を借り受け、デジタル化し、オリジナル資料は返却したうえで記述を施し、オンライン上でアクセス可能にしたもので、「デジタル参加型ミクロヒストリー・プロジェクト」と名付けられた。もう一つの事例は、2015 年に立ち上げられた「クリーブランドの警察による暴行に対する住民のアーカイブ」（A People’s Archive of Police Violence in Cleveland）[18]で、地域コミュニティが Omeka プラットフォームを用いてオンライン・アーカイブを形成・管理し、住民自身が彼らの語りをアーカイビングしたものである。こうした参加型アーカイブの実践では、アイテムレベルの資料へのタグ付け、アノテーションや翻刻が必要とされ、コミュニティ・アーカイブの収集、保存、アクセスを可能とするためのアーキビストと、一次資料の同定、解釈のためのパブリック・ヒストリアンの協働による専門的知識の提供が求められているという。

3.2 イギリス

アメリカで発展した公共歴史学の概念は、2000 年代後半以降にイギリスでも導入され始めることとなる。しかしながら、それ以前にイギリスの歴史学界では、ヒストリー・ワー

クショップやオーラル・ヒストリーの実践などで、一般市民による歴史叙述の試みがなされてきた。例えば、ニュー・レフトの歴史家であるラファエル・サミュエルは「歴史とは知識のひとつの社会的形態」であり、その作業は個人ではなく無数の人々の手で成されるべきであると主張している[19]。ところが、このときサミュエルは、「社会における歴史のより狭い定義を退ける」一方、「アカデミズムの外で行われるアーカイブズとアーカイブズ活動への関与の長い歴史を控えめに扱うアーカイブズの定義を強化」することとなった。しかし、21 世紀に入り、「デジタル技術の出現によって、より多くの人々が多様なコンテクストのもとでアーカイブズ資料を流布、再利用、解釈すること」を容易にし、1994 年に創設された遺産宝くじ基金が多様なコミュニティにおけるアーカイブ形成と歴史制作の実践を促していった。こうしたなかで、2017 年に公共歴史学はいかにアーカイブ的作業を通して可能となりうるかを問う特集が、イギリスのアーカイブズ・記録協会の学会誌『アーカイブズと記録』で組まれることとなった[20]。

イギリスにおける公共歴史学の特徴は、コミュニティ・アーカイブズの活動と結びついたラディカル・ヒストリーの実践が主流であることである[21]。この文脈において、コミュニティ・アーカイブズとは、「主流の、伝統的なアーカイブズ実践の外に位置づけられ、彼ら自身の用語において、彼らの歴史を文書化し、アクセス可能にするなかで、コミュニティの資源へのメンバーの積極的で継続的な関与」がなされること、として定義される[22]。そして、「コミュニティ・アーカイブズは歴史の制作を支援するだけでなく、それ自体が歴史制作のプロセスの間に生成されるものであ」り、「パブリック・ヒストリーの生成はアーカイブズ形成の実践の中に拘束される」ものとして把握されている[23]。

それでは、「アーカイブズと公共歴史学」特集のなかから、注目すべき論考を２本、紹介したい。まず採り上げるのは、ロンドンのウェルカム・ライブラリー貴重資料調査担当のエリーナ・カーターによる「「記録の誤りを正す」: アクティビスト・コミュニティによるアーカイブズの生成とキュレーション、ロンドン南部エレファント・アンド・キャスル再生事業へのアクティビストの応答に関する事例研究」と題する論考である[24]。エレファント・アンド・キャスル地区では、1994 年から再生事業が進められ、それにより住民たちは立ち退きを強いられることとなった。こうしたなかで、再生事業に異議を唱えるアクティビスト団体によって、ヘイゲート・ワズ・ホーム・オンライン・アーカイブ（Heygate was Home online archive; 以下、HwH アーカイブ）[25]、56a インフォショップに基づくサザーク・ノーツ・アーカイブ（Southwark Notes Archive, based at 56a infoshop）[26]、エレファント・アメニティ・ネットワーク（Elephant Amenity Network）[27]等のデジタルアーカイブが構築された。その中の一つ、HwH アーカイブは、再生事業進行中のヘイゲート団地の住民の経験をチャート化したもので 2013 年に立ち上げられた。このアーカイブには、「記録の誤りを正す」こと、「再生事業において破られた約束を記録すること」というミッションが掲げられている。当ウェブサイトは 2013 年 2 月に行われた強制収用命令（Compulsory Purchase Order, CPO）に対する公的調査の証拠として収集された情報を使用してつくられた。この

調査の目的は住民を彼らの家から立ち退かせる決定に反対するためになされた。異議を唱える人々は、彼らが再生事業の利益から排除されており、カウンシルによる彼らの住宅の資産評価査定が正しい市場価値を反映していない、と主張し始めた。サイトには、住民の証言と再生事業のタイムライン、組織化されたカウンシル文書、1994 年からの年ごとの開発業者の計画、再生プロセスの鍵となる出来事のチャートが含まれる。住民の証言は新聞のアーカイブとともに並置され、どのようにその土地財産が破壊されるに至るまでにメディアによって描かれたかを示すためにキュレーションが施された。CPO の調査以来、このサイトの管理者は記録を追加するために情報公開（Freedom of Information, FOI）と環境調査規制（Environmental Information Regulations, EIR）を使用し、アーカイブを構築した[28)]。

このサイト立ち上げのためにアーカイビングを行ったアクティビストの 1 人は次のように語っている。

> 「私にとってアーカイビングは、再生事業において何がなされたかの記憶として非常に重要な一部であった。……カウンシルは空っぽの空間、そこで新しい何かを祝うことのできる無歴史的な空間にすることを望んだ。……このひどい空間は…歴史と無関係な場ではない。……これはまさに生の問題である。なぜ我々がまだ描き続けるのか、なぜグループは依然運動するのか。この場所は健忘症の空間ではない。」[29)]

「アーカイビングの行為は再生計画へのカウンシルの関与に対抗する方法であると同時に、団地と運動の生きた記憶を保持する意識的な政治的手段となる」、とカーターはいう。さらに、このアーカイブは、当時の新聞報道による団地と再生計画の誤表象への挑戦としても運用された。新聞アーカイブの目的はどのようにこの地区の地価が下がり、犯罪の温床として言及されることがカウンシルと開発業者の再生協議を補強し、団地の実際の歴史を抹消したかを例示するためであった。そのため、新聞記事と住民の証言とが並べておかれ、FOI 請求によって収集された記録、例えば、首都警察から得られた犯罪統計によって、ヘイゲート団地の犯罪率は地区の平均より下の 45%であることを証明し、「犯罪行為の温床とされた団地の神話化されたイメージ」に異議を申し立てたのである。カーターは、「パブリック・ドメインにこの情報を位置づけることで、CPO の調査における法的証拠としてだけでなく、アクティビストの主張に注意を惹きつけるキャンペーンのツールとなる」、と指摘する[30)]。

また、新聞記事と住民の証言の並置、FOI 資料の配置、そして、立ち退き後の住民の離散の地図上でのマッピングといったアクティビストたちによるキュレーション行為はアクティビストたちのキャンペーンのなかで彼らのオーディエンスにその意味を理解可能にするために重要な役割を果たした。すなわち、「アーカイブの役割は調査からアクティブな関与へと移行」し、「記録のキュレーションと分析はコレクションの普及とアクセスの肝要な部分となる」のである[31)]。そして、このアーカイブは「未来のための過去」として活用さ

れる可能性を持つ。「アーカイブは他の集団を支援するために共有され、連携を築き、再開発へのローカルな反対を確保することを可能とする知の塊を構築する手段として記録」され、「証拠と連帯のネットワーク、同時代の闘争を支援するために届けられる資源を生み出し、同様の関心を持つグループ間で情報を共有し、どこかほかのアクティビストや未来のアクティビストに使用されうる記録を生み出す」[32]。アクティビストにとってアーカイブの活用とは現在と未来を変えるための行為である。

次に採り上げるのは、バーミンガム・シティ大学のメディア学科に所属するディマ・セイバーとポール・ロングによる論考、「「私は立ち去らないだろう。自由は血よりも貴い」情動から脆さまで：シリア内戦の記憶としてのクラウドソースの市民アーカイブズ」[33]である。話はドロップボックスのフォルダ内に入ったいくつかのデジタル・ファイルが著者らのもとに届けられたことに始まる。その各々のファイルには、「Yadan, ある一人の男の抗議.mp4」、「革命の宣言.m4v」等とタイトルが付されており、それは、シリアにおいて 2011 年に暴動が始まった町ダルアーで撮られ、非暴力の運動から、武装化、イスラム化した内戦へと転じた革命の最初の 18 カ月の記録であった。このドロップボックスのフォルダ内のデジタル・ファイルのコレクション、「ダルアー・アーカイブ」はシリア人のアクティビスト、ヤダン・ドレイ（Yadan Drajy）が彼の 4 人の友人とともに 2011 年 3 月から 2012 年 8 月にかけて記録した映像で、2013 年 9 月、ドレイはダルアーで撮った映像を含むハード・ドライブを運びながら、シリアとヨルダンの国境を徒歩で渡り、シリア内戦を表象したメディアを描く映画製作にこのアーカイブを使用するため、彼のハード・ドライブを二人の映画製作者、ラミ・ファラとリアナ・サリー、現在の著者の 1 人と、プロデューサーのサイン・バイル・サラセンに預けたのであった。ダルアー・アーカイブのコピーはこうしてバーミンガム・メディア文化リサーチ・センターに渡った[34]。セイバーとロングは、このアーカイブが「もはや直接のニュースとして「最前線から報道される」ことのないコレクション」であり、資料は「今や歴史的記録として追いやられ」ようとしており、「おそらく忘れられた死せる存在に対する恐れが、ドレイや彼の仲間のアクティビストにシリア内戦が広がる恐怖、果てしない、耐え難いクローズアップを捕捉させた動機でもあっただろう」[35]と問いかける。「ダルアー・アーカイブに描かれた暴力は、シリアが被ってきた人権侵害の証拠」となりうるかもしれない。そして、この出来事を目撃することが伴う「情動」は「アーカイブのコンテンツとして捕捉され、記録されたトラウマであるだけでなく、その物質性において、アーカイブそれ自体の立ち上げにおいて語られる」とセイバーとロングはいう[36]。近年、このアーカイブの「情動」（affect）はアーカイブズ学における重要な概念として浮上している。情動理論は、「権力とその乱用、構築、配分、動員、流布の実質的な分析に着手するツールを提供する情動、感覚、感情についての人文学的調査を通して発展した」とされる[37]。アーカイブにおける情動の重要性を論じるアン・ギリランドは、「記録とアーカイブズのアーカイブとしての特性は戦争と暴力によって影響を受けたコミュニティを支援するための前提条件として承認」されるべきであるという[38]。そして、ダルア

ーの資料に対する情動からの問いは、「何かをすること、保存することのコストとは何か。…何かをなさないことのコストとは何か、あるいは、ダルアーの資料からの生の映像を見せないこと、使用しないことのコストとは何か。誰が、どのようにこのアーカイブを使用するのか。誰がこれを所有するのか」、という政治経済学的問いを誘発する、という。すなわち、この場合、「個人、共同体、国家にとっての記録の不在ないし回復不能性がもたらす情動的作用とは何か」[39]が問われなければならない。それゆえ、情動のアーカイブを受け取ったアーキビストが「最初に何を重視すべきかはアクティビストがアーキビストとなり、彼の日々の戦争の日誌を記録した動機となった感覚と感情である」[40]とセイバーとロングは主張する。アーカイブの情動にどのように応答すべきか、専門職の倫理が問われている。

4. 結びに代えて―公共空間におけるアーカイブと市民、そして専門職

これまで述べてきたように、近年のアーカイブズ学、とりわけ、コミュニティにおけるアーカイビングの実践をめぐっては、実社会への応答としての「活用」の側面が注目されてきている。しかしながら、コミュニティ・アーカイブと公共性との関係には、多少留保が必要であろう。当該コミュニティにとってアーカイブを形成し、外部に開いていくことには何らかの重要な意義がある。しかし、アクティビスト・コミュニティのような場合、アーカイビングによって形成されるコミュニティ自体の流動性は少ないものと思われる。とはいえ、明確な訴えがあるがゆえに、コミュニティの凝集性が高まり、アーカイビングが（コミュニティ自体の、あるいは、他の誰かにとっての）次の活動の契機となりうる。ここで想定されているのは、ある出来事や経験の当事者間で、明確な合意のもとにアーカイビング活動が行われるコミュニティであるが、それはときに排他性を伴う。しかし、公共性とは本来、多様な「よそ者」に開かれた、複数の価値や意見の〈間〉に生成する空間であるとされる[41]。コミュニティ・アーカイブと公共性の問題を考えるうえで、せんだいメディアテーク「3 がつ 11 日をわすれないためにセンター」（通称「わすれン！」）の試みは示唆的である。「わすれン！」のアーカイビング・コミュニティは「「震災と復興のプロセスを記録する」というシングル・イシューにおいて関心を共有する人々の集まり、ーいわゆる「関心のコミュニティ community of interest」ーである」[42]、という。何らかの明確な合意に基づく「強いコミュニティ」から、ゆるやかに関心を共有する「弱いコミュニティ」まで、手段や目的に応じてコミュニティ・アーカイブの主体は多様であり、アーカイビング・コミュニティとアーカイブの関係性についても時空間的なプロセスとコンテクストの変容のなかで捉える必要があるだろう。それでは、多様な主体によるアーカイビング活動に対して、専門職としてのアーキビストは何をなすべきであろうか。

多様な市民やコミュニティによるアーカイビングの民主化は、アーキビストのあり方を改めて問いかけさせる。こうした状況においては、アーキビストの専門職としての権威はますます非 - 専門職の人々へと再配分されていくだろうが、それは悲観すべきことなのであろうか。むしろ、専門職としてのアーキビストは、市民のアーカイビングの実践に耳を

傾け、その活動を活発化させるよう促していく必要があるのではないか。また、市民によるアーカイビングやパブリック・ヒストリーの実践の多くは、その活動に意識的な、アクティブ・ユーザーといわれる人々である。そうした人々の活動を支援し、促進させていくことも専門職の役割の一つであるが、専門職のもう一つの役割として、より意識的なユーザーとそうでない潜在的なユーザーとをつなぎ、アーカイブズ機関への関与やコミュニティ・アーカイビングの活動をさらに拡大させ、活性化させるファシリテーターとしての役割が考えられる[43]。その事例の一つとして、ハダーズフィールド大学のアーキビスト兼レコード・マネジャー、サラ・ウィッカムが報告している所蔵コレクションを媒介としたプロジェクトがある[44]。この大学アーカイブズでは人員と予算の不足からコレクションの管理が行き届かず、保存環境も悪く、ユーザーに対するアクセスも十分に提供できていなかった。そうしたなかで、2013 年から 17 年にかけて遺産宝くじ基金とハダーズフィールド大学の資金を得て、「ヘリテージ@ハダーズフィールド・プロジェクト」を開始することとなった。このプロジェクト[45]では、人びとの参加の機会を提供し、コレクションの保存、解釈、目録化、収集への直接的関与を促すこと、より幅広い仕方でコレクションとの相互作用をもたらすために人々に専門家としての能力をもたらすこと、コレクションへのアクセスの新たな手段と情報をもたらすことが目指され、実際に地域のラグビーリーグ団体、音楽愛好家団体、地域史団体の参加を得てコレクションを用いた写真の同定、資料を通した語り、演奏会など様々な試みがなされた。ウィックマンは、同プログラムを総括して、次のようにいう。

> 「プログラムを企画したグループからのフィードバックはヘリテージ・キー（Heritage Quay）が安心でき、信頼できる公共圏であり、彼ら（とイベントのオーディエンス）がこの空間に積極的に参加することを喜びと感じたことを示している。…このプログラムには日常を楽しむ子供たちや若い人々の支え……があった」[46]

このプログラムで注目すべき点は、それぞれのイベントの企画を各団体の人々に委ねたことである。そして、個々の企画自体は多少問題点も指摘されているが、催されたイベントには老若男女多くの住民の参加が得られたという。また、この試みは一回限りのものではなく、3 年間を通じた継続的なもので、継続した活動を行うなかで、専門職と参加者との信頼関係を醸成していったことも重要であろう。この事例には、アーカイブが公共的な場となりうること、また、そうした場がいかに創出されうるか、についての手がかりが多く含まれているように思われる。資料とコミュニティ、そして、公共性をめぐるさらなる考察が求められるが、専門職と市民との間の責任の分有と相互の信頼の醸成は、公共空間において「アーカイブ」を活性化させるための前提として肝要であるといえるだろう。

註

1) 歴史学研究会編「シリーズ 歴史家とアーキビストの対話 【第 4 回】」、『歴史学研究』、No. 974、2018 年 9 月。

2) 後藤真「「デジタルアーカイブ」とアーカイブズ、そして歴史学を取り巻く現在と未来」、『歴史学研究』、No. 974、2018 年、23 頁。

3) Cook, Terry, "Evidence, memory, identity, and community: four shifting archival paradigm", *Archival Science*, (12), 2012, pp. 95-120.

4) Ketelaar, Eric, "Archival Turns and Returns", Anne Gilliland et. al. ed., *Research in the Archival Multiverse*, Monash University Publishing, 2016, pp. 228-268.

5) デリダ, ジャック、福本修訳『アーカイブの病』法政大学出版局、2010 年、52 頁。

6) Stoler, Ann L., "Colonial Archives and the Art of Governance. On the Content in the Form", in Carolyn Hamilton et. al. ed., *Refiguring the Archive*, Kluwer Academic Publishers, 2002; Stoler, Ann L., *Along the Archival Grain: Epistemic Anxieties and Colonial Common Sense*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2009.

7) Blair, Ann, ed, "Toward a Cultural History of Archives", *Archival Science*, 7(4), 2007; Head, Randolph C., ed., "Archival Knowledge Cultures in Europe, 1400-1900", *Archival Science*, 10(3), 2010.

8) Bastian, Jeannette A., "Moving the margins to the middle: reconciling 'the archive' with the archives", in Foscarini, F., H. MacNeil, B. Mak and G. Oliver ed., *Engaging with Records and Archives: histories and theories*, Facet Publishing, 2016, p. 6.

9) ISO 30300. *Information and Documentation – Records Management – Part 2: Guidelines* (Geneva, International Standards Organization, 2011): 3.1.7.

10) Millar, Laura, "Touchstones: Considering the Relationship between Memory and Archives", *Archivaria*, (61), 2006, p. 119.

11) 菅豊『「新しい野の学問」の時代へ―知識生産と社会実践をつなぐために―』岩波書店、2013 年、157-160 頁。

12) Dearstyne, Bruce W., "Archives and Public History: Issue, Problems, and Prospects － An Introduction", *The Public Historian*, 8(3), 1986, pp. 6-9.

13) Cox, Richard J., "Archivists and Public Historians in the United States", *The Public Historian*, 8(3), 1986, pp. 29-30.

14) Samuels, Helen, "Who Controls the Past", *American Archivist* 49(2), 1986, pp. 109-124.

15) Owens, Trevor, & Jesse Johnston, "Archives as Peers in Digital Public History", LIS Scholarship Archive Works, 2018, at https://osf.io/preprints/lissa/4hvtb/

16) Theimer, Kate, "Exploring the Participatory Archives", *Archives Next*, 2011, at http://archivesnext.com/?p=2391

17) https://www.saada.org/

18) http://archivingpoliceviolence.org/

19) Samuels, Raphael, *Theatres of Memory: Past and Present in Contemporary Culture*, London: Verso, 1994, p. 8.

20) Hoyle, Victoria, "Editorial: archives and public history", *Archives and Records*, 38(1), 2017, pp. 1-4.

21) Flinn, Andrew, "Archival Activism: Independent and Community-led Archives, Radical Public History and the Heritage Professions", *InterActions: UCLA Journal of Education and Information Studies*, 7(2), 2011, at http://escholership.org/uc/item/9pt2490x

22) Stevens, Mary, Andrew Flinn and Elizabeth Shepherd, "New Frameworks for Community Engagement in the Archive Sector: From Handing Over to Handing On", *International Journal of heritage Studies*, 16(1-2), 2010, p. 60.

23) Hoyle, op. cit., p. 3.

24) Carter, Elena, "'Setting the record straight': the creation and curation of archives by activist

communities. A case study of activist responses to the regeneration of Elephant and Castle, South London", *Archives and Records*, 38(1), 2017, pp. 27-44.
[25] http://heygatewashome.org/index.html
[26] https://southwarknotes.wordpress.com/heygate-estate/
[27] https://elephantamenity.wordpress.com/
[28] Carter, op. cit., p. 29.
[29] Ibid, p. 32.
[30] Ibid, pp. 32-3.
[31] Ibid, pp. 34-5.
[32] Ibid, p. 37.
[33] Saber, Dima, and Paul Long, "'I will not leave, my freedom is more precious than my blood.' From affect to precarity: crowd-sourced citizen archives as memories of the Syrian war", *Archives and Records*, 38(1), 2017, pp. 80-99.
[34] Ibid, p. 82.
[35] Ibid, p. 88.
[36] Ibid.
[37] Cifor, Marika, "Affecting relations: introducing affect theory to archival discourse", *Archival Science* 16, 2016, p. 8.
[38] Gilliland, Anne, "Participatory Archives & Human Rights", cited in Caswell, Michelle, "Defining Human Rights Archives: Introduction to the Special Double Issue on Archives and Human Rights," *Archival Science*, 14, 2014, pp. 207-213.
[39] Cifor, Marika, and Anne Gilliland, "Affect and the Archive, Archives and Their Affects: An Introduction to the Special Issue", *Archival Science*, 16(1), 2016, p. 2.
[40] Saber and Long, op. cit., p. 91.
[41] 市澤哲「歴史資料をめぐる「よそ者」と「当事者」―専門家的知性と市民的知性」、九州史学会／公益財団法人史学会編『過去を伝える、今を遺す―歴史資料、文化遺産、情報資源は誰のものか―』山川出版社、2015 年、236-39 頁；齋藤純一『公共性』岩波書店、2000 年。
[42] 佐藤和久、甲斐賢治、北野央『コミュニティ・アーカイブをつくろう！ー仙台メディアテーク「３がつ１１にちをわすれないためにセンター」奮闘記』晶文社、2018 年、251-53 頁。
[43] Eveleigh, Alexandra, "Participatory Archives", in MacNeil, Heather, et. al. ed., *Currents of Archival Thinking*, Second edition, Santa Barbara, California: Libraries Unlimited, 2017, p. 309.
[44] Wikcham, M. Sarah, *Final evaluation report of the Heritage @ Huddersfield Project*, Project Report, University of Huddersfield, 2018.
[45] プロジェクトで対象とされたハダーズフィールド大学アーカイブズのコレクションは、主に大学に寄託された音楽、スポーツ、政治、女性、教育、アート、産業などに関わる資料からなり、コレクションを収めるアーカイブズ施設は「ヘリテージ・キー」と呼ばれる。Heritage Quay, What will you discover?, at http://heritagequay.org/
[46] Wikcham, 2018 の appendix 4 を参照。

参考文献

Bastian, Jeannette A., "Moving the margins to the middle: reconciling 'the archive' with the archives", in Foscarini, F., H. MacNeil, B. Mak and G. Oliver ed., *Engaging with Records and Archives: histories and theories*, Facet Publishing, 2016, pp. 3-19.
Blair, Ann, ed, "Toward a Cultural History of Archives", *Archival Science*, 7(4), 2007.
Carter, Elena, "'Setting the record straight': the creation and curation of archives by activist communities. A case study of activist responses to the regeneration of Elephant and Castle, South London", *Archives and Records*, 38(1), 2017, pp. 27-44.

Caswell, Michelle, “Defining Human Rights Archives: Introduction to the Special Double Issue on Archives and Human Rights,” *Archival Science*, 14, 2014, pp. 207-213.
Cifor, Marika, “Affecting relations: introducing affect theory to archival discourse”, *Archival Science* 16, 2016, pp. 7-31.
Cifor, Marika, and Anne Gilliland, “Affect and the Archive, Archives and Their Affects: An Introduction to the Special Issue”, *Archival Science*, 16(1), 2016, pp. 1-6.
Cook, Terry, “Evidence, memory, identity, and community: four shifting archival paradigm”, *Archival Science*, (12), 2012, pp. 95-120.
Cox, Richard J., “Archivists and Public Historians in the United States”, *The Public Historian*, 8(3), 1986, pp. 29-45.
Dearstyne, Bruce W., “Archives and Public History: Issue, Problems, and Prospects ― An Introduction”, *The Public Historian*, 8(3), 1986, pp. 6-9.
Eveleigh, Alexandra, “Participatory Archives”, in MacNeil, Heather, et. al. ed., *Currents of Archival Thinking*, Second edition, Santa Barbara, California: Libraries Unlimited, 2017, pp. 299-325.
Flinn, Andrew, “Archival Activism: Independent and Community-led Archives, Radical Public History and the Heritage Professions”, *InterActions: UCLA Journal of Education and Information Studies*, 7(2), 2011, at http://escholership.org/uc/item/9pt2490x
Head, Randolph C., ed., “Archival Knowledge Cultures in Europe, 1400-1900”, *Archival Science*, 10(3), 2010.
Hoyle, Victoria, “Editorial: archives and public history”, *Archives and Records*, 38(1), 2017, pp. 1-4.
ISO 30300. *Information and Documentation – Records Management – Part 2: Guidelines* (Geneva, International Standards Organization, 2011): 3.1.7.
Ketelaar, Eric, “Archival Turns and Returns”, Anne Gilliland et. al. ed., *Research in the Archival Multiverse*, Monash University Publishing, 2016, pp. 228-268.
Millar, Laura, “Touchstones: Considering the Relationship between Memory and Archives”, *Archivaria*, (61), 2006, pp. 105-126.
Owens, Trevor, & Jesse Johnston, “Archives as Peers in Digital Public History”, LIS Scholarship Archive Works, 2018, at https://osf.io/preprints/lissa/4hvtb/
Saber, Dima, and Paul Long, “’I will not leave, my freedom is more precious than my blood.’ From affect to precarity: crowd-sourced citizen archives as memories of the Syrian war”, *Archives and Records*, 38(1), 2017, pp. 80-99.
Samuels, Helen, “Who Controls the Past”, *The American Archivist* 49(2), 1986, pp. 109-124.
Samuels, Raphael, *Theatres of Memory: Past and Present in Contemporary Culture*, London: Verso, 1994.
Stevens, Mary, Andrew Flinn and Elizabeth Shepherd, “New Frameworks for Community Engagement in the Archive Sector: From Handing Over to Handing On”, *International Journal of heritage Studies*, 16(1-2), 2010, pp. 59-76.
Theimer, Kate, “Exploring the Participatory Archives”, *Archives Next*, 2011, at http://archivesnext.com/?p=2391
Stoler, Ann L., “Colonial Archives and the Art of Governance. On the Content in the Form”, in Carolyn Hamilton et. al. ed., *Refiguring the Archive*, Kluwer Academic Publishers, 2002.
Stoler, Ann L., *Along the Archival Grain: Epistemic Anxieties and Colonial Common Sense*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2009.
Wikcham, M. Sarah, *Final evaluation report of the Heritage @ Huddersfield Project*, Project Report, University of Hddersfield, 2018.

市澤哲「歴史資料をめぐる「よそ者」と「当事者」―専門家的知性と市民的知性」、九州史学会／公益財団法人史学会編『過去を伝える、今を遺す―歴史資料、文化遺産、情報資源は誰のものか―』山川出版社、2015 年、220-244 頁。
後藤真「「デジタルアーカイブ」とアーカイブズ、そして歴史学を取り巻く現在と未来」、『歴史学研究』、No.974、2018 年、18-23 頁。

齋藤純一『公共性』岩波書店、2000 年。
佐藤和久、甲斐賢治、北野央『コミュニティ・アーカイブをつくろう！ー仙台メディアテーク「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」奮闘記』晶文社、2018 年
菅豊『「新しい野の学問」の時代へ―知識生産と社会実践をつなぐために―』岩波書店、2013 年、157-160 頁。
デリダ, ジャック、福本修訳『アーカイブの病』法政大学出版局、2010 年。
歴史学研究会編「シリーズ 歴史家とアーキビストの対話 【第 4 回】」、『歴史学研究』、No.974、2018 年 9 月。

Web サイト

A People's Archive of Police Violence in Cleveland
http://archivingpoliceviolence.org/
Elephant Amenity Network
https://elephantamenity.wordpress.com/
Heritage Quay, What will you discover?
http://heritagequay.org/
Heygate was Home online archive
http://heygatewashome.org/index.html
South Asian American Digital Archive
https://www.saada.org/
Southwark Notes Archive, based at 56a infoshop
https://southwarknotes.wordpress.com/heygate-estate/